

博士論文審査報告書

論文題目

クメール古代都市イーシャナプラの研究

Study on the Ancient Khmer City ISANAPURA

申請者

下田 一太

ICHITA SHIMODA

建築学専攻・建築史研究

2010年 2月

今日のカンボジアを中心として、インドシナの大部分を版図に治めたアンコール王朝は、12世紀に建築都市の空間構造と造形芸術の面においてクメール文化のピークをなすアンコール・ワット寺院やバイヨン寺院の建立を成し遂げた。クメール文化は紀元前後より都市計画・建築計画・芸術全般・社会制度・農業技術などの様々な分野に対してインドからの影響を受容した。しかしながら、それと同時に土着的な思想や慣習、造形感覚等も根強く通底し続けていたものと考えられ、伝播した外来文化と混融することで、クメール独自の文化を形成することとなった。七世紀に新都として造営されたイーシャナプラは、こうした外来と自生の両文化が激しくせめぎ合い、飛躍的に造形芸術が展開した舞台である。

六世紀以前の寺院の多くは、都市におけるランドマークであったり、山中あるいは洞窟内にひっそりと配された孤立的な施設であったようだが、イーシャナプラにおいて寺院は巨大化・複合施設化し、多数の土侯国を従えた古代的な専制国家の祭政構造の象徴として建立されるようになった。これは、当地域が一定の成熟度を迎えたことによる結果でもあろうが、より直接的な理由としては、インドシナ地域における小規模な港市国家が軒並み凋落し、この地域に影響を及ぼしていた扶南王朝に交代する新たな勢力「チェンラ王朝」の出現を許したことにある。この新興勢力は、国家の主力産業として、それまでの交易に加えて農業の拡大に取り組んだ。その結果として、トンレサップ湖の周辺の比較的肥沃で水耕耕作に適した地区に中心地を構え、農業生産による大きな余剰が確保された。その余剰力が、巨大な消費地となる都市の形成と造形芸術の飛躍を促した。周辺地域におけるそれ以前のいかなる都市にも比類しがたい新都イーシャナプラはこうして造営されたとするのが、著者の研究の背景に対する大きなヴィジョンである。

「サンボア・プレイ・クック」と今日では呼ばれているこの古代都市址は、19世紀末に密林から発見された後、20世紀前半にフランス極東学院の研究者によって各種の調査が行われた。それらの研究は、偉大なる文明の痕跡であるアンコール遺跡群の保存や調査の片手間に行われたもので、十分といえる内容ではなかったが、それでもプレ・アンコール期を代表する重要な遺跡であることは誰の目にも明らかであった。その後、1960年代に入るとカンボジア国内の混乱により、この遺跡群は再び放置され、密林に戻る事となる。ようやく1990年代に至り、カンボジア政府により部分的な整備修復の手が入るようになった。本研究はその後、著者が属する早稲田大学建築史研究室の手により、90年代末からこれまで10年以上にわたり継続され、この遺跡群を対象とするほぼ唯一の調査研究事業の建築学的・考古学的な成果を著者が現場主任として中心となってまとめたものである。この新たな調査により、20世紀前半に実施された、遺跡群に対する既往の認識は大きく更新されることとなり、全く新たな古代都市の全容解明へ向けて大きく歩を進めることと

なった。本論考で追求された課題は大きく二点である。古代都市イーシャナプラの「空間的構造」と「歴史的変遷」の解明である。本論は三章からなり、前者には第一章と第二章が、また、後者には、第三章があげられている。

第一章では、現地踏査や空中写真の分析により、都市の中核地区の規模と空間的な構造が明示されている。現地調査では、新たに多数の祠堂や土手、水路、溜池などの痕跡が記録され、これまでの遺跡群の認知を規模と精度において大きく改訂した。即ち、本論考で「寺院区」の他、「北寺院区」、「都城区」と都市全体を区分し、古代都市の中核地が整理された。従来「寺院区」は遺跡群の中心として知られていた区域であるが、新たに複数の遺構が記録され、正確な遺構の位置関係が判明したため、それらの遺構の詳細が記されると共に、配置計画、プラサート・サンボーが他の寺院よりも上位の位置を占め、国家寺院として中心的な施設であった可能性を提示している。「北寺院区」では、ローバン・ロミアス寺院群の各祠堂の建造年代や増改築の痕跡について詳細な考察が加えられている他、M.45 サイトでの発掘調査等の結果からもアンコール時代の遺構の増築を推論している。また、古代都市を二分して南流するオー・クル・ケー川に付随する溜池やダム、水路といった微妙な土地の高低差を活用した水利関連施設が寺院施設と密接な関係を有していることが明らかにされた。「都城区」については、既往の研究は皆無であったが、計 56 の組積造遺構を含むサイトが現地調査により発見された。この地区は三方を環濠と土塁に、また一方を河川によって囲まれており、一辺 2km のほぼ正方形をしている。この都城区内部の表採調査から、屋根瓦集積地の特定等による木造王宮や官衙施設地区の推測、そして同じく考古学発掘調査による編年資料となる装飾建築石材の発見によって、プレ・アンコール時代の建立になる寺院区とほぼ同時期に都城区も造営されたこと、さらに碑文や建築様式史的比較によってアンコール時代にも、この都市が地方都市の一つとして機能していた可能性を指摘している。これは今後のより詳細かつ広域な考古学的発掘調査に向けての重要な指針を明示したものとして大いに評価することができる。また、著者は以上のイーシャナプラの都城構造を俯瞰して、東側に位置する寺院区が都市全体の「表」をなし、西側の都城区は政治や交易を司り、実質的な支配機構としての「奥」を構えたと整理している。これは、祭政を重層的に一体化させるというクメールにおける支配原理が象徴的に都市構造に反映された新たな古代都市モデルの提示であって、著者の卓見である。

第二章では、都城の西辺中央に発する古道の追跡調査と、古代都市の周辺に広がる溜池と畦畔痕の分布調査の結果を分析したものである。これまでもイーシャナプラとアンコール遺跡群を連絡する「王道」と呼ばれる幹線道路の存在が指摘されていたが、調査によって、両地区は王道によっては連結されていないことを明らかにした。一方、都城に発する別の土手道が王道と

ほぼ平行して走っており、これがアンコール地区でもプレ・アンコール時代の遺跡が集中している西バライの南側の地区に達していることを確認している。このことから、プレ・アンコール時代にはすでにアンコール地区が王都であるイーシャナプラとの唯一の連絡を有する重要な拠点であった可能性を著者は指摘している。さらに溜池や畦畔は、古道の周囲に分布しており、消費地である王都を支える後背地が都城の周囲と古道沿いに連綿と広がっていた様子を明かにしている。これによって、大規模な寺院と都城の建立がこの時代に可能となった背景とアンコール時代への展開を説明するための手掛かりが得られたといえよう。

第三章では、プラサート・サンポー内での複数回にわたる発掘調査の結果を整理し、建立当時の寺院の構成を復元考察した他、各所に認められた増改築の痕跡について、詳しい考察を加えている。増改築の実年代を推察するために、寺院内から出土した碑文や彫像などを手掛かりとして考察を加えた結果、7世紀に建立された同寺院は、10世紀に主尊の交代を伴う改宗があり、大々的な改修工事があった可能性を指摘している。また、当初は中央へと階段状に高くなるような段台型の寺院形式であったものが、増改築の結果として、伽藍全体が水平に展開する形式に改造された可能性にも言及している。主祠堂を中心に、複数の祠堂と方形の周壁による多重の構成を示すこの寺院は、その平面形式から後世のクメール寺院の伽藍配置形式を彷彿とさせること、そして立面形式もまた同様に、最初期の複合寺院にして既にある一定の完成度をもつ姿が認められると論述している。この指摘はクメール寺院の国風化ともいえる独自の達成が、この寺院の建立によって顕在化したことを明示したものであって著者の大きな貢献である。

以上を要するに、本論考は、建築史学、考古学、地形学など様々な専門的アプローチと豊富な実地調査から具体的なクメール古代都市の解明に努めたものである。空間的・時間的な大きなスケールの解釈においても、具体的な対象と資料の分析面からも、都市の全容の骨格と基本的な特質を明らかにした。さらなる詳細の究明にあたっては、考古学的な発掘調査を含む、地下の埋設遺構の調査に歩を進めることが期待されるが、本論文はそのための指針となるべき示唆に富む考察と、高い資料性を兼ね備えた充実した成果である。

このように本論文は、建築史学において意義深い研究であり、建築学の発展に大いに貢献した。よって博士（建築学）の学位に値すると認められる。

2010年2月

審査員	(主査)	早稲田大学教授	工学博士(早大)	中川 武
		早稲田大学教授		石山修武
		早稲田大学教授	工学博士(早大)	佐藤 滋
		早稲田大学准教授	博士(工学)早大	中谷礼仁